

いまを 見つめて

第9回



太田 愛

おおた あい／香川県生まれ。1997年テレビシリーズ「ウルトラマンティガ」で脚本家デビュー。「TRICK2」「相棒」などの脚本を手がける。2012年『犯罪者クリミナル』（上・下）で小説家デビュー。13年に『幻夏』を発表、17年には3作目の小説『天上の葦』（上・下）を刊行。

自分がどういう社会で 生きたいのかを考える

事件を消費しない

私が執筆した小説『犯罪者』『幻夏』『天上の葦』の三部作には3人の主人公が続けて登場します。3人は価値観も境遇もバラバラなのですが、社会の理不尽が生み出した事件に遭遇したとき、自分が被害者でなくても「それっておかしいと思う」と受け止め、解決に力を尽くします。彼らがそうするのは、「世の中そんなもの」と思わず、自分がどういう社会で生きたいのかを考え、それを望む人間として自分に何ができるかを考えるからです。

大切なのは、社会的なできごとや事件を消費しないことだと思います。たとえば子どもが親の虐待にあつて亡くなる度に「鬼母」などと非難の声が挙がりますが、そうやって加害者を責めて起こったことを消費しても、次に起こることは止められない。私たちににとって本当に必要なのは「どうすれば次は防げるか、可能性を少なくできるのか」と考えていくことではないでしょうか。

社会全体に息苦しさが広がっているせいか、「どうすればより良くなるか」と考える

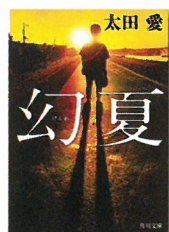
前にストレスが溜まりすぎていて、それを発散するために事件を消費してしまう—という悪循環に陥っているように感じています。

佐野SAのストライキで感じたこと

今年のお盆に東北自動車道の佐野サービスエリアでのストライキが話題になりましたね。あれは非常に劣悪な労働条件のなか、従業員と雇い主の間に立って交渉をしていた部長が突然解雇されて、残された従業員が部長を守るために行動を起こしたものでした。

しかし、なぜストライキが起きたのかという報道はほとんどされず、「ラーメン食べたかったのに—」と言う子どもや「お盆にストライキをやるのは迷惑だよ」と言う人の声ばかりが集められていました。

自分たちは物を買って消費する側になることもあれば、労働力を提供してお金をもらう側にもなります。同じ労働者が「もっとまともな形で働きたい」「これでは死んでしまう」と思っただけなのに「迷惑だ」と責めることは、結局、自分自身の首を絞めることになると思います。



『幻夏』
KADOKAWA

少女失踪事件を捜査する刑事・相馬は現場で奇妙な印を発見し、23年前に失踪した親友の記憶を蘇らせる。友人の鍵水、修司とともに失踪と印の真相に行きついたとき、恐るべき罪が浮上する。司法の信を問うミステリー。

ところで、近年サービス業や交通機関でストライキが起こった時、「自分の利益のためだけに人に迷惑をかけて抗議するのは、世間から反発を受けてあたりまえ」「権利を行使することで迷惑がかかるのなら、最初から行使用しないのが日本人のマナーだ」といった声をよく耳にします。他人に迷惑をかける行為は有無を言わず非難されて当然という風潮は以前から日本の社会にありましたが、ここ数年でいっそう強くなっていると感じます。

しかも、実際には他人に迷惑をかける行為のすべてが非難されるわけではありません。強く非難されるのは、ほとんどがマジョリティ（多数者）に迷惑をかける行為です。逆に、マイノリティ（少数者）に迷惑をかけても、声高に非難されることはありません。このことは、ストライキだけでなく、電車やバスにベビーカーとともに乗ることや育児休暇を取ることが「迷惑」と責められる場合があることを思い起こせばよくわかります。

こういう風潮が生まれてくる背景には、「自己責任」論ともつながる、日本特有の道徳教育があるように思います。